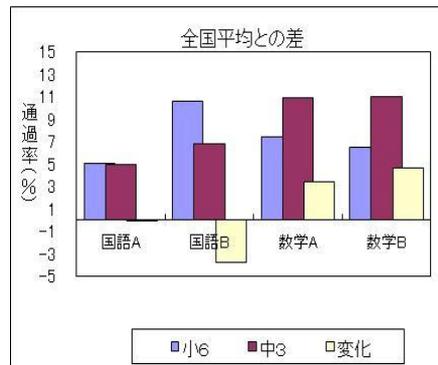
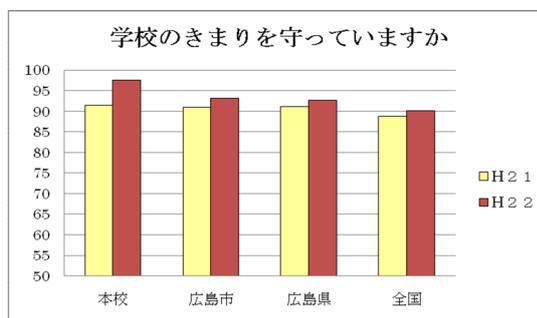
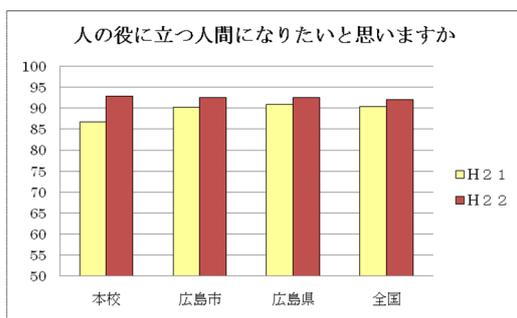
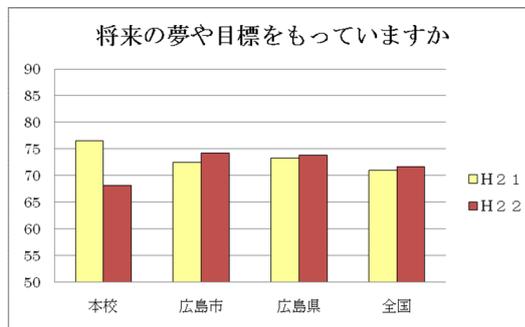
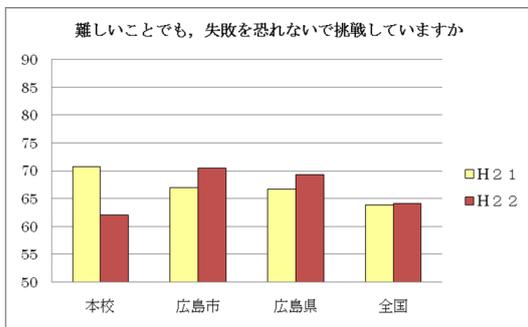


I 児童生徒の学力の現状

(1) 平成 22 年度卒業生は、1 年生の時にひろしま型カリキュラム言語・数理運用科の開発校となり、3 年間言語・数理運用科の学習をした学年である。その平成 22 年度の全国学力・学習状況調査では、全国平均を上回っている。特に A 問題より B 問題の方が全国と比べて高く、数学はどちらも 10 ポイント以上高い。同学年が小 6 のときとの比較でも、数学、特に B 問題の伸びが大きい。正答率 30%未満の生徒の割合は、A 問題より B 問題の方が高く、特に数学にその傾向が強い。



(2) 平成 21 年度卒業生は、言語・数理運用科の授業は 2 年間であったが、広い意味の学力により伸びがあった。平成 21・22 年度の全国学力・学習状況調査のキャリア教育に関わる意識において、最後までやりとげてうれしかったことがあるという、達成感はどちらも 95%を越えて平均より高くなっている。平成 21 年度の調査では、チャレンジ精神、自己肯定感、将来の夢があるなどの項目の肯定的評価が高くなっている。また、平成 22 年度の調査では、公共の精神、学校の決まりを守っているなどの肯定的評価が高く、学習時間も長いなど、それぞれの学年の生徒の特徴をよく表している。



(3) 基礎・基本定着状況調査においては、県平均と同等または上回っているが、30%未満の生徒の割合は少しずつ高くなってきている。県平均と比較すると国語の 30%未満の割合が高くなっている。(小中ギャップの最大は学力である。小中ともに双方からの接続の改善が必要である。)

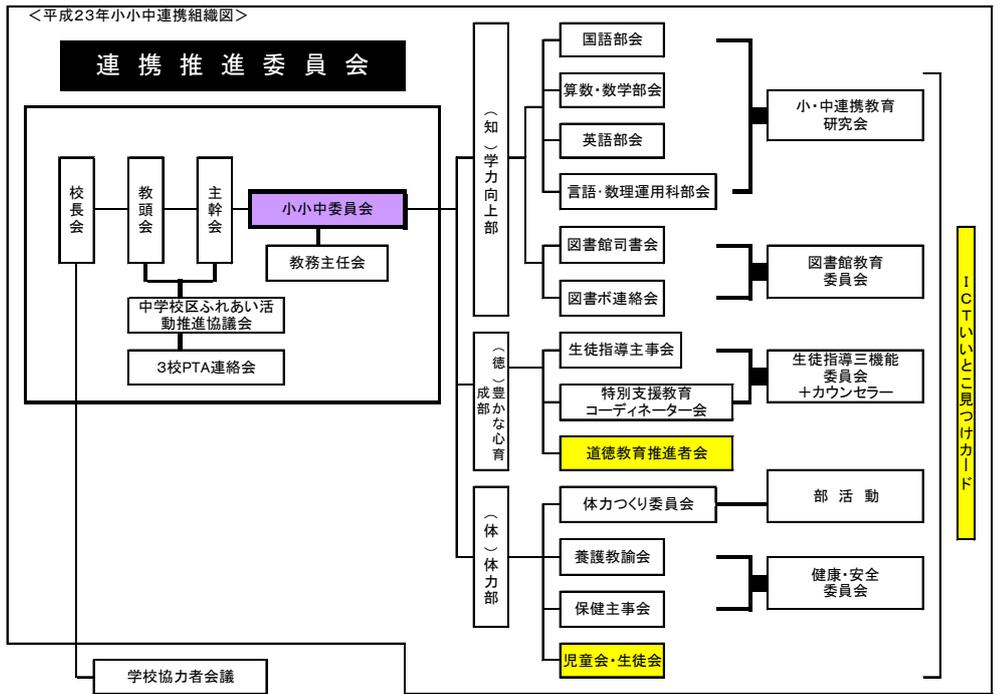
II 授業改善の取組

- (1) ひろしま型カリキュラム「言語・数理運用科」の研究開発校として平成 20 年度より教材開発、評価等に取り組んだ。
- (2) 言語・数理運用科の研究開発を進めていく中で、思考力・判断力・表現力を育成するための授業改善の方向性が明らかになった。教科の壁を越えて取り組むことができる教材であったため、授業改善に向けての教師のベクトルをそろえやすかった。
- (3) 「目標と指導と評価の一体化」による授業づくりを理論の柱とし、小学校とともに研修を進めている。目標（めあて）を明らかにして授業を行うことの重要性が認識できた。
- (4) 思考させるためには自分の考えをしっかりと持たせることが重要であり、そのためには個人思考の時間を十分にとることが大切であること、考えたことをより深めるために小グループや全体での交流が大切であることがわかった。
- (5) 思考力・判断力・表現力等を育成するためには言語力の育成が不可欠である。そこで、学年ごとの「言語力のめあて表」を発達段階に応じて作成し教室に掲示するとともに、授業だけでなくあらゆる場面で「言語力のめあて表」を意識させる指導を行っている。また、語彙力を高めるために、ノートやワークシートなどの工夫に取り組んでいる。

《 教師用 》

		話す・聞く	読む	書く
1年	感想や意見を述べる 情報を正しく取り出す	事実と意見・感想を聞き分ける力を育てる 具体的に説明できる力を育てる 賛成・反対・付加・質問	情報を正しく取り出す力を育てる 事実と意見・感想を読み分ける力を育てる	具体例を挙げて意見を書く力を育てる
2年	説明や解釈をする 論理性を身につける	分析的に聞く力を育てる 論理的に説明する力を育てる 理由・根拠・賛同・反論	分析的に読む力を身につける 論理の展開を読み取る力を育てる	論理の展開を工夫して書く力を育てる
3年	評価や批評をする 自己を表現する	意図（思考）を聞き取る力を育てる 討論する力を育てる 評価・批評・賞賛・批判	意図を読み取る力を育てる 自分なりの判断や根拠に基づいて評価しながら読み取る力を育てる	意図を明確にして書く力を育てる

- (6) 少人数指導は、1 学年ではつらつプランを国語・英語・数学で実施。2 学年では数学の習熟度別少人数指導、国語の指導方法の工夫改善による少人数指導を実施。3 学年では英語で習熟度別少人数指導を実施している。
- (7) 五日市南中学校区小・中連携教育研究会では、「義務教育修了時 15 歳の姿」を全教師で共有し、国語科、算数・数学科、英語科、言語・数理運用科、道徳の 5 つの教科チーム（平成 23 年度）で交流・研修する中で、小中ギャップの解消に努めている。ひろしま型カリキュラム言語・数理運用科を活用して、総合的な学習の時間の全体計画、各学年プログラムを作り直し、小中の接続を図っている。特にキャリア教育と学力に注目して改善を図っている。

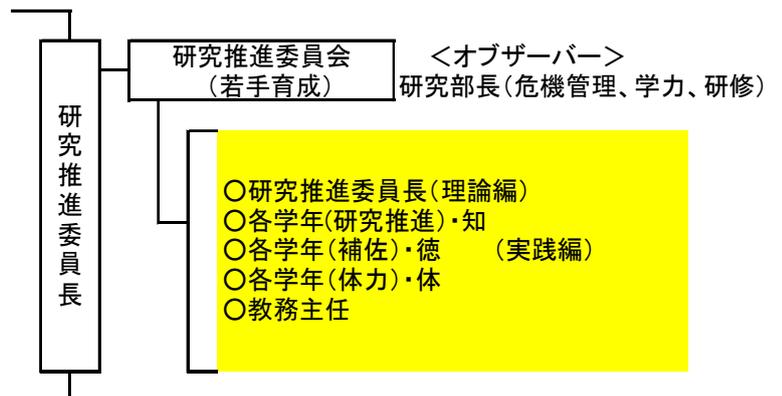


Ⅲ 児童生徒の実態を踏まえた組織的な取組

学校教育目標 『学ぶことと生きることの2つが1つになる生徒の育成
～地域の未来を生むチャイムのない学校へ向けた開発的生徒指導を通して～』

研究主題 『ひろしま型カリキュラムを活用した言語力の育成をめざして
～「いいところ見つけ！」カードを活用した開発的生徒指導を通して～』

(1) めざす生徒像（義務教育修了時 15 歳の姿）を共有するための研修会を年度末・年度当初に行っている。そして、目標実現のための具体的な方策や研究の視点を全教師が共通して持ち、授業研究に取り組んでいる。11月の公開研究会を区切りとして、以降は次年度に向けての方向性を示していくというサイクルで、研究推進委員会を中心に組織的に行っている。



(2) 「確かな学力」を育成するためには仲間を認め、支持しあう学級づくりが不可欠である。生徒指導の三機能を基盤に据え、「いいところ見つけ」カード、「ほめ・励ます」カードなどの取組を行っている。

(3) 1年間に 5 回の授業研究会を行っており、本年度は 17 名が研究授業を行う。指導案は教科会や学年会・チームで作成し研究推進委員会で検討することで、教師の能力の向上を図っている。また、授業後は全員参加のワークショップ型（指導案を全員で検討、KJ法によるグループ討議など）の研究協議を行うことで効果を上げている。

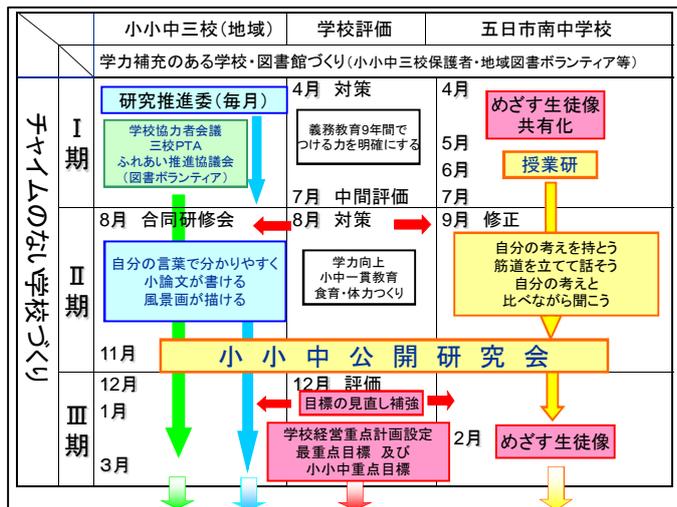
9月までの校内研修会の実施状況は次の通りである。

- 5月 第1回研究授業（道徳）
- 6月 第2回研究授業（言語・数理運用科） 講師 加藤明先生
小小中授業参観
- 7月 第3回研究授業（国語・数学・英語） 講師 吉田裕久先生
- 8月 校内研修（小中連携）
校内研修（特別支援教育）
校内研修（道徳教育）
- 9月 第4回研究授業（国語・数学・言語数理運用科）

- (4) 授業研究会や事前授業、校内研修会に指導主事を招いて、指導助言をいただいている。また、教育センターの指導主事には校内研修会のあり方、進め方などでも多くの示唆をいただいている。
- (5) 小・中連携の中心に「五日市南中学校区小・中連携教育研究会」を据え、「目標と指導と評価の一体化による授業づくり」を小小中共通の理論の柱としている。

IV 家庭との連携（地域における公立学校、学校評価）

- (1) 知徳体の調和のとれた「生きる力」を、五日市南中学校区として2つの小学校、家庭、地域が連携して子どもたちに育成する取組をすすめている。学校を家庭だけでなく地域に開放し、育てたい生徒像（義務教育修了時 15歳の姿）や学校・生徒のようすなどを様々な場面で発信していくなかで、多くの保護者や地域の方々の力を貸していただけるようになった。子どもたちの健やかな発達のために大きな力となっている。



- (2) 本中学校区では「小小中」を合い言葉に、ひろしま型カリキュラム（言語・数理運用科）を核に小・中連携を進めてきた。言語・数理運用科の目標である思考力・判断力・表現力を育成するためには、小学校との連携が不可欠だからである。これら活用する力の育成については教科の壁が比較的 low、話し合いや研修が進めやすいため小中の壁も低くなっていった。

- (3) 小・中で一貫して子どもを育てるために、小小中研究推進委員会を組織して毎月1回中学校の校長室で委員会を開いている。「義務教育修了時 15歳の姿」も小小中研究推進委員会や校内研修会で練られたものである。小小中合同研修会で共有し、小・中学校の全教師がベクトルをそろえられるようにしている。また、特別支援教育や生徒指導などの合同研修会を開催している。



- (4) 学校と家庭と地域で子どもたちを育てるために、11月から12月にかけてのそれぞれの学校の公開研究会を、「五日市南中学校区地域公開研究会」として地域に公開し、小・中学校の全教師が参加している。
- (5) 昨年度からICTを活用して「いいところ見つけ！」カードの取組を行っている。教師が日常の場面の中で生徒のいいところを見つけ、個人のカードに出力したものを年に4回全保護者（生徒）に渡している。学校で組織的に生徒のよいところを認め、伸ばすこの取組は、開発的生徒指導の面や保護者とつながるという点からも重要であると考えている。
- (6) 生活習慣改善の取組として、まず、毎年夏休み前に「生活習慣アンケート」を実施し、課題のある生徒については夏休み前の個人懇談会で「生活習慣改善について保護者と話をするようにしている。また、年に2回教育相談を実施し、生徒実態の把握に努め、指導に生かしている。
- (7) 前後期それぞれの間評価では、連絡票に学習のアドバイス（5教科）を行っている。2学期制のメリットを生かして学習の連続性を意識し、これまでの学習のようすや課題を知らせ、長期休業中の学習のアドバイスを行うことで、長期休暇を有意義に過ごすとともに目標を持たせて学習に取り組ませたいと考えている。
- (8) 夏休み、冬休みにはサマースクール、ウインタースクールを実施している。学力補充とともに、チャレンジ学習（サマーチャレンジ、ウインターチャレンジ）では生徒自らが講座を選択し、自分の学力や体力を伸ばす努力をしている。毎年3分の1程度の生徒がチャレンジ学習に参加している。
- (9) 保健体育科が中心となって体力づくりを行っている。授業中の5分間、年間2回の「体力づくり強化月間」（全員参加）、サマーチャレンジでは距離泳、ウインターチャレンジでは長距離走等を実施する中で、生徒の体力は少しずつ向上している。
- (10) 地域の公立学校として、小・中の児童・生徒の交流は大切である。小学校のサマースクールで中学生（1・2年生）が学習や水泳のサポートを行ったり（サマースクールサポートボランティア）、3学年の総合的な学習の時間の発表会に小6を招いたりすることで、児童・生徒の交流を進めている。
- (11) 保護者や地域の方々とともにボランティア清掃、メモリアルロードづくりなどのボランティア活動を行い、多くの生徒が参加した。
- (12) 図書館の改装を機に館内・蔵書が整備されてきた。読書案内の充実や推薦図書の紹介などもおこなわれ、多くの図書ボランティアが携わってくれている。これに伴って利用者も増えている。来館者は3年間で7～8倍、貸出数は10倍弱である。また、図書ボランティアによる漢字検定学習会が開かれ、3年間で受検者は3倍強になった。今後も地域の文化センターとして図書館をさらに充実させたい。